全学共通カリキュラム総合教育B　講義報告

全カリ総合B「現代社会とジェンダー」を終えて

近藤 弘（立教大学文学部　教授・コーディネーター）

これまで主として各学部が担ってきた全学共通カリキュラム総合教育B（全カリ総合B）を、学内の各研究所や事務局等にも担ってもらうという方針が出された。そこでジェンダーフォーラムでもエントリーしようということになり、トップバッターとして私がコーディネーターとして前期半期で開講することになった。今後もフォーラムとして継続的に取り組んでいく意向もあることから科目名を「現代社会とジェンダー」とし、サブタイトルとして今年度は「ジェンダー形成をめぐる諸問題」とした。「現代社会とジェンダー」という科目名のもとにその年のコーディネーターがサブタイトルを付けていく形で続けていければと考えたからである。

今年度の授業では特に「男らしさ」「女らしさ」というジェンダー形成がどのように行われてきたのか、そこにどのような問題が生じているのかを中心に展開していくことにした。なお、ジェンダーの問題は決して女性だけの問題ではなく、男性の問題でもあるので、男子学生の受講を期待する旨シラバスには書いた。結果として男子学生もかなり受講してくれた。スタッフとして明治学院大学の望月重信先生（教育社会学）にはフル・レギュラーとして、神奈川大学非常勤講師の岸澤初美先生（女性学）にはセミ・レギュラーとして関わってもらうことにした。また、コミュニティ福祉学部の浅井春夫先生にも男性のセクシュアリティ形成に関して特別講義をお願いすることにした。

まず、受講生に関してだが、こちらが予想していたより多くが登録をした（235名）。ただし、常時出席者は平均して120名から130名であった。授業としては適正規模だったと思う。全カリ科目ということでやはり各学部とも1年生が多く、ジェンダーという言葉ははじめて聞くという受講生が大半を占めていた。なお、若干ではあるが高校時代にジェンダーに関する授業を履修したという受講生もおり、高校段階でもジェンダーに関する授業が取り組まれ始めた様子がうかがわれ興味深かった。男女の比率は、登録上は6：4で男子学生の方が多くなっていたが、実際の出席状況をみると女子学生の方がやや多い感じであった。

授業の進め方としては、各回1時間ほど講義をし、その後質疑応答の時間を

とり、終わりには出席票を兼ねて感想文を書いてもらうという形を取った。これは出来るだけ双方向的な授業にしたいと考えたことと、開講時にその旨伝えたところ、受講生もそれを期待していることがうかがわれたからである。ただし、つい講義に時間をとられ質疑応答の時間がほとんどとれないときもあり、その時には早速感想文にもっと質疑応答の時間をとってほしいという要望が書かれるなど、受講生の反応は素早かった。

授業の内容に関しては、今回はジェンダー形成をめぐる諸問題を中心にするということで組んだ。まず、はじめにジェンダーの基礎理論ともいうべきフェミニズムと女性学に関してその概要を私と望月先生で講義した。そのあと望月先生からジェンダーにかかわるターミノロジーの解説が行われた。ジェンダーに関してはどうしても横文字が多くなり、受講生からもっとわかりやすい言葉で説明して欲しいという感想が寄せられ、望月先生も苦慮されていたようであった。ただし、望月先生の軽妙洒脱な講義は受講生から評判がよかったことが感想文からうかがえた（先生は開講時、ジェンダーは「自演だ」と喝破し、受講生の度肝を抜いたことが大きく影響しているようだ)。岸澤先生からは学校現場におけるジェンダー・フリー教育の実践に関する講義があった。先生はまた、受講生にジェンダー意識をはかる簡単なテストを実施し、その結果をもとに授業を進めるという方法を用いて、できる限り双方向の授業になるように工夫された。特別講義として浅井先生にはセクシュアリティ（特に男性のセクシュアリティの形成）を論じてもらった。冒頭からレイプ事件を取り上げながら特に男性のセクシュアリティをめぐる問題を提起され、かなり刺激的な授業であった（受講生の感想にもあまりに刺激的であることに戸惑いを感じている様子がうかがわれた)。セクシュアリティの問題はまだまだ興味本位に取り上げられる傾向が強いなかで、先生の講義は一石を投じたものであったように思う。

実は今回の授業を組み立てるにあたって、ひとつの試みとして受講生たちによるミニシンポジウムを考えていた。この授業を通して受講生たちが何を問題として受けとめたかを知る方法として適切ではないかと思ったからである。シンポジストはこちらで選ぶのではなく、受講生自身から名乗り出てもらう形を取ることにした。はたして名乗り出てくれるだろうかという不安もあったが、意外にあっさりと女子学生2名、男子学生2名の計4名が名乗り出てくれた。結果としてはきとんとしたシンポジウムとはならなかったが、各人が考えるジェンダーにかかわる問題が提起され、フロアーとのやりとりも結構盛り上がり、まずまずは成功であったといってよいであろう。

なお、出席数の少ない受講生への救済も兼ねて、エキストラカリキュラムとしてセクシュアルハラスメント防止対策委員会主催の講演会およびジェンダー

フォーラム主催の新座キャンパスでのジェンダーセッションへ参加を授業への出席とみなすことにした。出席数の少ない受講生だけではなく、多くの受講生が講演会やセッションに参加しており、受講生たちのジェンダーに関する関心の高さを表しているように思った。

こうして、試行錯誤を繰り返しながら何とか授業は終了した。受講生がこの授業をどのように受けとめたかは、毎回の感想文を分析することにより把握できる。しかし、まだ十分分析をしていないので、ここでは、それに代えて、ジェンダーに関する意識を知るために作成し、授業時に実施した簡単な調査があるので、その結果を紹介することでその一端をあきらかにしてみたい。ただし、その結果をすべて報告する余裕はないので、その中から直接に授業に関する質問への回答を紹介することにとどめる。なお、この調査結果に関しては別の形でまとめたいと思っている。

授業に直接かかわる質問は以下の3問である。

「Q1 全カリ総合Bを受講して4月の時点より自分の考えに変化があったと思いますか」「Q6 授業を聞いていて『自分はセクシスト（性差別をしてきた）をしてきた』と思うことがありましたか」「Q9 全カリ総合Bの『現代社会とジェンダー』のような授業はこれからも大学で続けるべきだと思いますか」

回答者総数は127名で、女子が69名、男子が58名であった。

まずQ1に関しては、「・はい」が60名（全体の47%。以下同じ）、「・いいえ」が20名（16%）、「・何ともいえない」が46名（36%）であった。約半数近い受講生が考え方が変わったと答えており、この授業がそれなりに受講生の考え方に影響を与えていることがわかる結果だとみてよいであろう。ただし、どのように考え方が変わったかはこの質問ではわからない。感想文を丁寧に読み込むことが必要であろう。

次にQ6に関してであるが、「・たくさんある」（8名）と「・ときどきある」（58名）を合わせると、66名（全体の52%）が授業を通して自分が性差別をしてきた経験があることに気づいたと答えている。男女でみると、むしろ女子の方が男子よりも少し上回っている（女子37名、男子29名）。それだけ女子の方が差別に敏感ということであろうか。面白い結果だといえよう。

Q9はこうした授業が必要であるかどうかを聞いたものであるが、「・絶対続けるべき」（56名）と「・できれば続けるべき」（65名）を合わせると121名（全体の94%）となり、圧倒的多数がこうした授業の継続を求めていることがわかる。今回、この授業をコーディネートした者としてうれしい結果である。

幸い、来年度も「現代社会とジェンダー」というタイトルでジェンダーフォーラムとしてエントリーしており、受講生の期待に応えることができることは、

初回のコーディネーターとしてその責を果たすことができたかといささか自賛している次第である。

この授業を進めるにあたっては、レギュラースタッフとして毎回かかわっていただいた望月先生、セミレギュラースタッフではあったが、ほとんど毎回かかわっていただいた岸澤先生のお二人の支えが大きかったことを記し、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。